

## 第12章

# ライフステージの課題と支援

個々の発達障害の特性によって困難さの現れ方や顕在化する時期、課題には違いがあります。

ここでは各ライフステージでの課題をピックアップします。



# 幼児期の課題

## 幼児期の特徴

幼児期は、子供の発達にも個人差がありますが、発達障害のある子供は発達に偏りが見られることがあります。支援者は子供の発達段階や発達障害の特性を見極め、個別に必要な支援を提供することが求められます。

広島県発達障害者支援センター（以下、センター）では、幼児期の子供に関する相談については、保育所や幼稚園（支援者）への支援が中心になっています。

## 幼児期の相談における主な主訴

### 発達面について

- 発達障害なのか、個性の範囲なのか見極めが難しい
- 発語の遅れがある
- 運動面の苦手さ
- 保護者の受容の問題

### 日常生活面について

- 年齢相応の基本的な生活習慣の獲得が難しい
- 身辺自立が難しい
- 養育環境の問題
- 就学に向けての準備

### 集団活動場面について

- 指示されたことが理解できない
- 適切に援助を求めることが難しい
- 場面に応じた振る舞いが難しい
- 対人関係でのトラブル

幼児期は、将来の生活に向けた基礎的な力を育む大切な時期です。発達障害の特性のある子供の場合、定型発達の子供に比べると、様々な場面でうまくいかない経験を積み重ね、自信を失ってしまう可能性があります。

そのため、発達障害の特性のある子供の早期発見・早期療育を目指し、支援者はアセスメントや必要な支援の組立を行う知識と力量が必要になっています。

# 学齡期の課題

## 学齡期の特徴

学齡期になると、徐々に身の回りのことが本人に任されるようになってきます。忘れ物や無くし物、気の散りやすさやケアレスミスといった不注意症状が顕在化してくる子供も多くなります。

センターでは、学齡期の子供に関する相談については、学校や放課後児童クラブへの支援が中心となっており、コンサルテーションを経て、個別相談に繋がるケースがあります。

## 学齡期の相談における主な主訴

学習面について	日常生活面について	コミュニケーションについて	対人関係について
<ul style="list-style-type: none"> <li>●書字の困難さ</li> <li>●読みの困難さ</li> <li>●算数の困難さ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●忘れ物、無くし物が多い</li> <li>●登校準備が難しい</li> <li>●身だしなみが整っていない</li> <li>●養育環境の問題</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●指示されたことが理解できない</li> <li>●適切に援助を求めることが難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●良好な家族関係が保てない</li> <li>●距離感がうまく図れない</li> <li>●感情のコントロールが難しい</li> </ul>



### 精神的なストレスや不安の高まりによる身体症状の出現

- 登校渋りや起床困難、帰宅後の混乱、頭痛、腹痛等の身体症状
- チック症状、強迫症状や食行動の異常、抑うつ不安症状等の精神症状
- こだわりやファンタジー、感覚の過敏さの増強・・・

学齡期になると、課題の主訴が発達特性よりも、学業、身辺面、対人関係や行動・行為に関する事、他の精神症状の出現等によるものが増えてきます。その背景には、発達障害の特性が関連していることが少なくありません。

そのため、表面上に現れている課題だけでなく、包括的な情報と連携が必要になります。

# 青年期の課題

## 青年期の特徴

青年期は自分を見つめるようになり、他者の目を気にするようになる時期です。イメージすることや人の気持ちを読み取ることが苦手であるため、自他の違いに気づき孤立感を深めてしまったり、自分がどう思われているのかが分からず混乱したりすることがあります。

センターでは、学校や大学等の所属機関からの紹介や家族からのご相談によって、個別相談に繋がるケースが少なくありません。

## 青年期の相談における主な主訴

### 所属機関について

- 学校に関すること
- 大学・専門学校に関すること
- 進路や就職活動に関すること
- 職場に関すること

### 日常生活面について

- 生活リズムが整わない
- 金銭管理が苦手、お金を使い過ぎてしまう
- ゲームやスマートフォンへの依存

### 対人関係について

- 友人関係について
- 家族関係
- 異性関係（適切な距離感が分からない）
- SNSでのトラブル

青年期の頃から対人関係が複雑になり、周りとのギャップが次第に大きくなることから、発達障害の特性による生きづらさが表面化しやすくなります。精神的にとっても傷つきやすい青年期は、日常のちょっとした躓きや困難が、学校生活や社会生活への不適応に繋がる可能性があります。

# 成人期の課題

## 成人期の特徴

近年は「大人の発達障害」に関する問題がマスコミ等でも大きく取り上げられていますが、支援ニーズへの対応は十分とは言えない状況があります。学生時代は成績優秀であることで、多少変わった言動があっても個性の範囲で捉えられる場合や、特性が目立たず顕在化しにくい側面があります。しかし、各ライフステージにおける本人への要求水準の変化により、不器用さや情緒面の問題、対人コミュニケーションの質的な問題が目立ってくることで生きづらさに繋がってしまっています。

## 成人期の相談における主な主訴

### 就労について

- 職業イメージが持てない、特定の職種に固執
- 求職活動の方法が分からない、面接が苦手
- 履歴書の書き方が分からない、電話連絡が苦手

### 職業生活について

- 仕事ができない、上司・同僚との関係不和
- 職場環境・仕事内容の変化に対応できない
- 身分不安定、労働不可による問題
- メンタルヘルスにおける休業・復職の問題
- 休日・アフターファイブの自己管理
- 昇進・キャリアアップに対応できない

### 日常生活面について

- 貧困・無年金、フリーター等の不安定な生活
- 結婚・夫婦生活・育児等の生活環境の変化に対応できない
- 家族間の関係不和
- 多重債務、金銭管理、引きこもり
- 近隣トラブル、触法行為

センターでは、大人になってから社会生活上の問題に直面し、発達障害というカテゴリーに辿り着く人たちが急激に増えてきています。課題の要因を慎重に分析して、より適切な支援に結びつけられるように、地域の社会資源の情報と対象者のニーズをマッチングさせていく技量が支援者には求められます。

# 高齢期の課題

## 高齢期の特徴

高齢期の相談では、多くの場合本人が困っているという認識はなく、家族、近隣住民、支援者等から相談が寄せられることがあります。高齢化に伴い、家族や近隣住民とのトラブルから、今までできていた生活が急にしづらくなるケースがあります。

センターへの相談では、発達障害の診断に至らないケースの割合が多いですが、発達障害の特性を踏まえた支援や対応が必要になります。

## 高齢期の相談における主な主訴

### コミュニケーションについて

- 目線が合わない
- 会話が一方的、話を聞かない
- 説明の理解が難しい

### 日常生活面について

- 金銭管理ができない
- こだわりの強さ
- 衝動的な行動
- 健康管理が難しい、必要な医療機関への通院に繋がりにくい

### 対人関係について

- 約束を守らない
- 家族、近隣住民とのトラブルがある



### 加齢に伴う身体的・精神的な変化、環境の変化

- 心身のコンディション不調が多くなる（継続的な受診をしておらず、急に重篤な身体疾患、行動心理状態が出ることもある）
- 住まい、職業、支援者、家族等の環境の変化が起きる（相談することへの抵抗感がある、必要な準備ができておらずパニック、攻撃、ひきこもりに繋がることがある）

今後、高齢期に関する相談が増加していく見込みがあるため、高齢者福祉分野の支援機関（地域包括支援センター等）や地域の支援機関（基幹相談支援センター、社会福祉協議会等）との連携が必要になってきています。

# 女性の発達障害の課題

## 女性らしさを求められる

女性の場合には、発達障害があっても子供の時期には行動面の問題が目立ちにくいと言われています。それにも関わらず、近年は発達障害を疑って医療機関を受診する女性が増えています。

センターへの相談では、幼少期から周囲との違和感を感じながら大人になり、社会生活を送る中でさらなる生きづらさを感じて発達障害の診断に至ったという女性のケースも少なくありません。

女性は、生活面や対人関係において「女性らしさ」を求められ、家庭や職場等の様々な場面で男性よりも強いストレスを受けることが多くあります。

## 「過剰適応」の状態になりやすい

女性の場合は周囲を気遣い、自分を人に合わせようとする傾向が強くみられます。そのため、女性の方が「過剰適応」の状態になりやすいと考えられます。

人によっては「適応すること」自体を過剰に優先させるあまり、「本来の自分」を抑え込んでしまうケースがあります。うまく適応できない時には、「自分の力不足」「自分が悪い」と自らを責める傾向もあります。

表面的に周りにうまく適応しているように振る舞っているだけで、実際には心の中で大きな葛藤に苦しんでいるということが周囲の人に気づかれにくいことがあります。

